

【秀句鑑賞】

大根煮る夫の背わづか丸くなり 友子

『煮る』は上一段活用の動詞。その終止形と連体形はいずれも同じ「煮る」である。掲句において、終止形の「煮る」として使われているものとすれば、句意は、大根の煮物料理を終わった作者がふと夫を見ると、その背中が少し曲がっているのに気がついた、ということになる。他方、「煮る」が連体形として使われているとすれば、大根を煮ている夫ということになり、作者がその夫の背中を見ていて僅かに曲がっているに気づいた、ということになる。動詞の活用形の取り方によって主客が逆転するのである。

俳句としては、男子厨房に入らずという古くからの戒めを破って料理を自ら楽しむ夫が居て、その夫が煮物料理に挑戦しているものと鑑賞した方が面白い。

【秀句鑑賞】

新しきはうきに落葉絡みをり ヤエ子

「はうき」は箒(ほうき)のことである。箒には、先端部分の材料の違いによって羽根箒・棕櫚箒・草箒・竹箒などがあるが、掲句の場合は、地面の落葉を掃除するのであるから、おそらく竹箒であろう。竹箒は枯れた竹の枝先を集めて竹竿先端に針金で括りつけたものである。昔は荒物屋から買ってくるほかに、裏山から集めた竹の枝を束ねて自家製することもあった。葉が全て払い落されて裸になっている箒の竹の枝先に、掃いている落葉が絡み付いているのである。

作者が目にした情景はこれだけであるが、この事実を俳句として提示されたとき読み手には、葉を欠落している竹の丸裸の枝先と、これを包み込もうとしているかに見える落葉の振る舞いとの間、相補のないし交歓的な関係性を読み取ることもできる。しかし、このような擬人的な深読みをしなくても、掲句は眼前直覚の優れた俳句である。

【秀句鑑賞】

梁上ぐるジャッキの軋む小春かな 明美

古い民家の大修理に立ち会ったのであろう。長い年月に歪んだ梁をジャッキで持ち上げている。梁を介して家の荷重を支えているジャッキは、ギヤ部分で軋み音を上げている。その軋み音は、悲喜こもごもの家族の記憶を包み込んでいるかも知れない家そのものが上げていている悲鳴のようにも聞こえる。座五に据えられた「小春」との対比がよく効いている。この「小春」によって緊張から緩和へのこころの転換が行われている。

【秀句鑑賞】

待つひとを傘に見つけし時雨かな 秀一

巧みな句立ての句である。「傘に見つけし」は、一読すると傘の色や柄などを手掛かりにして待ち人を見つけたと言っているようであるが、それでは詰らない。そもそも傘の色や柄には明確な判別指標となるほどの違いはないのではないか。もしも傘の色や柄によって来る人が判別できたのだとすれば、待ち受けている者は、

その人が持っている傘の色や柄を良く知っていることになる。しかし、人によっては傘を複数本もっており、このような場合、当日どの色の傘、どの柄の傘を差して来るのか、待ち受けている者には知る由もない。

したがって、傘が揺れたときに傘の下にのぞかせる顔を見て、待ち人を発見したのである。このように読み取る方が、俳句としての情感が出てくる。若いカップルの待ち合わせであっても、年配者同士の待ち合わせであってもよく、待ち受ける人と待ち人との関係性に連想が広がる。

### 【秀句鑑賞】

元気だと送るメールや風邪の粥 ツル子

「私は元気だよ」とメール送信したが、実態は、風邪の作者は、メールを打った後、鼻水をすすりながら、最低限の栄養補給である粥の鍋を扱っている。

電話では声から病態を相手に察知され、また、スカイプ通信では声と姿がともに送られるが、メールでは姿や声は送られない。受信者に心配をかけまいと、連絡手段にメールを選択したことに、作者の心配りが感じられる。

なお、この句は次のようにすることもできる。

「元気よ」と送りしメール風邪の粥

### 【秀句鑑賞】

名残りの蚊満腹にして逃がしけり 幸

夏の盛りには、親の敵のように追いまわし、刺されてはならじと殲滅方法をあれこれ考えていた蚊も、秋になると流石に勢いが弱まる。作者は腕に取りついた蚊を振り払うことなく、血を吸うに任せた。満腹となった蚊が振り向いて礼を言ったかどうかは知らないが、作者がそつと腕を動かすと逃げて行った。秋という物悲しい季節は、同じ生命体として空間を共有するものに対する親和力を高めるようだ。実際に蚊が満腹になったかどうかは別として、「満腹」であると断定したところが良い。

### 【秀句鑑賞】

冬めきて和風庭園整ひぬ 真三

十一月末に出雲大社の神在祭に出かけ、そのあと足立美術館に立ち寄った。館内外の多彩な展示作品も勿論素晴らしかったが、美術館が中に浮かぶように造られた日本庭園は、噂通りの名園であり、息もつかせないほどの景観の連続であった。しかし、宿に入って日本海の漁火を見下ろしているとき、美術館でそこはかとなく感じていたことが、明瞭に脳裏に浮かび出てきた。それは、ひとつの欠点もない人間の造営物は、見ていて疲れるといふことである。あまりに整い過ぎたものよりも、どこかに綻びのあるものを望むのは、身勝手な贅沢なのであろうか。

作者が見た日本庭園も、担当の庭師が研鑽と努力を傾注した見事なものである。冷たい空気感のなかに日本庭園の清冽性を捉えたところが良い。

### 【自句自解】

舞ひ落つる冬蝶、デフレスパイラル 守

「デフレスパイラル」は景気の低迷―不景気による賃金の低下―賃金低下による購買力の減少―購買力の減少による生産の抑制というように、負の因子が連鎖的に働いて経済が萎縮・疲弊して行くことを端的に表す言葉である。このような経済用語を俳句に取り入れるのは、その句立てを誤ると「一人よがりの観念俳句」、「軽い時事俳句」という紋切型の批判を浴びる。作者は、この二十年にわたるデフレ期の最初の頃に、

恋猫の飛び乗るデフレスパイラル

という句を作った。恋に狂った猫が隣家の屋根に飛び乗ったのではなく、デフレスパイラルという螺旋状翼の上に飛び乗ったとしたのである。恋猫⇨景気は、螺旋状翼に沿って下に移動して行くものとイメージしたのである。

今回の冬蝶を主人公とする句は、恋猫を主人公とした前回の句が春バージョンとすれば、「デフレスパイラル」句の冬バージョンである。命が尽きて舞い落ちる冬蝶が、そのままデフレスパイラルの螺旋状翼に吸い込まれて深みに落ちて行くようなイメージで作句したものである。

(文責 代表 増田 守)